日本史上の関東に関する二大問題

——特に関東人にとって銘記すべき二大問題の意義について——

土　屋　喬　雄

目　次

まえがき
第一節　中世から近世における関東と清和源氏とのつながりの大きさについて
——日本史上のすべての幕府創設者は清和源氏で，関東に本拠または地盤をもったこと——
第二節　維新を平和的市民革命とした主役，関東人・幕臣勝海舟についての新評価
——維新を平和的市民革命と規定し，その主役を勝海舟とするのは，筆者の私見かつ新説であるゆえ，学界の批判をうける必要あること——
むすび

ま　え　が　き

東京に生まれ，80年のうち約60年のあいだ東京で生活してきた私にとって，東京がその中心である関東，あるいは東京のヒンター・ランドである関東は，故郷である。何故に東京が故郷だといわず，関東が故郷だというのか。その理由は，主として利根川水系その他の水系によって形成された関東大平原なくして江戸・東京は，日本第1の大都市・首都として成立しえなかったからである。

私だけでなく，私の生れた家の祖父まで十数代は，徳川幕府の旗本であったから，私の祖先たちから父まで十何代の間江戸で生まれ，江戸で生活した。もっとも私の父は少年時代しか江戸の生活はしなかったが，大部分東京で生活し，私は東京で生れ，大部分東京で生活した。

ところで祖父の代まで受けていた知行地（俸禄）は，利根川の向うの下野国にあったから，先祖代々，父の少年時代までの生活基盤は，将軍家から受けていた知行（俸禄），いいかえれば関東平野の田畑の生産性にあった。かくて私の家は先祖代々祖父まで十何代，関東平野のうち利根川水系によって形成された土地と水ならびにそれを耕作した農民のおかげで生きつづけてきたのである。

このようなわけで，私は江戸・東京と関東平野ならびにそれを造った利根川水系に早くから深い関心と親しみをもってきた。そして，今から57年前の大正10年から東京大学で最初の日本経済史専攻者に任ぜられていらい，関東平野ならびに利根川・多摩川等に関する諸問題につきいくらか研究した。また関東平野の生んだ大実業家で，日本の近代的経済・産業の形成・発展の時代における最大

の指導者であった渋沢栄一の厖大（全68巻，伝記文献として東西古今を通じて第一の厖大なものらしい）な伝記資料の編集主任者として熱心に従事もし，完成もしたのである。

こうして，私は代々の先祖に代って，いささかながら関東平野の土と水と人の恩恵にむくいたわけである。なお余生があれば，つづいて関東平野の恩恵に報いることをしたいと考えている。

はじめから筆者の私事を述べて，おこがましい次第であるが，私がとくに関東平野と利根川に深い関心と近親感をもっている理由につき，この拙文の読者に知っていただかなければ，この拙文の趣旨を正しく知っていただけないように思うからである。もっとも，考えようによっては，私が関東に関心と近親感をもつのは，祖先以来十何代何百年の間の故郷である故であるということを明かにすることは，この拙文の記述には“郷土愛”から来る“お国自慢”的な感情がまつわることによって，記述の“客観性”，“科学性”を失なうことになる可能性があると疑われるおそれがないでもない。しかし，そのような可能性がある，ないは，執筆者の学問に対する姿勢如何による。執筆者が，科学研究には，自然科学であれ，社会科学であれ，客観的・合理的・実証的立場が確立されていなければならぬという信念をもつ人であれば，故郷に関する歴史なり，現情勢なりの研究であっても，記述の“客観性”，“科学性”がそこなわれることはありえない。筆者は，そのような立場，すなわち“郷土愛”と科学的認識をゴッチャにしない立場で，この拙文を執筆するものであることを申上げておきたい。

第一節　中世から近世における関東と清和源氏とのつながりの大きさについて

——日本史上のすべての幕府創設者は，武家第1の名門清和源氏で，関東に本拠または地盤をもったこと——

日本史上武家の起源は，平安時代にある。武家のうち最初に一応政権を掌握したと見てよい人物は，平清盛である。清盛は征夷大将軍の宣下をうけて幕府を創設した源頼朝とは異なり，1167年（仁安2年）太政大臣となり，いわゆる六波羅政権を樹立したが，太政大臣は本来天皇の師範となるべき最高の官職，天皇補佐の職である。まだ名実ともに武家が軍事と政治の実権を完全に握ったものとは見られないのである。

征夷大将軍は，延暦16年（797年）坂上田村麻呂を征夷大将軍に任じたのが，日本史上の最初である。その後，建久3年（1192年）源頼朝が征夷大将軍の宣下を受け，幕府を創設したのが，第2回である。その権力の強大の点は，坂上田村麻呂のそれに比しはるかに大きく，頼朝は，いわゆる天下の兵馬の権（軍事と政治の権）を掌握するにいたった。そして朝廷もまたこれを重んじ，海内の軍事・政治を一に征夷大将軍に委ね，常置の職となしたと，見られている。足利尊氏，徳川家康もこの職に就いたのである。

上述のように，武家時代すなわち中世（鎌倉時代・室町時代・安土・桃山時代を含む）から近世（江戸時代）にかけ，征夷大将軍の宣下を朝廷から受け，幕府を開いた3氏について，その年代と幕府の継続期間を見れば次のとおりである。

1　源頼朝，建久3年（1192年）征夷大将軍宣下，幕府を鎌倉に置く。鎌倉幕府の将軍は，頼朝より実朝まで3代，元久2年（1205年）北条義時執権となり，執権15代で鎌倉幕府崩壊。

2　足利尊氏，延元1年（1336年）征夷大将軍となり，京都室町に幕府を置く。室町幕府は，21代で永禄11年（1568年）崩壊。室町幕府を亡ぼした織田信長も信長の後を継いだ豊臣秀吉も，幕府を置くにいたらないで亡んだ。

3　徳川家康，慶長8年（1603年）征夷大将軍の宣下をうけ，江戸に幕府を置く。江戸幕府の将軍は家康より慶喜まで15代で慶応4年（1868年）大政奉還で崩壊。

上の源氏，足利氏，徳川氏はいずれも清和源氏であるが，そのことは必ずしも一般的知識になっていないので，私は特記して，強調したいと思う。このことは，武家時代専攻の日本史家の間では常識であろうと思われる。けれども，近世日本史家では，このことを正確に知っている人は，多いとはいえないようである。

しかも，この三氏は，いずれも関東に関係の深い家である。この二つのことについては，関東の人々でも三氏のそれぞれにつき正確に知っている人は少ないかも知れない。私は数十年間たびたび関東に故郷をもつ学生に，徳川家康の祖先の根拠地につき尋ねたことがあったが，多くは三河と答えた。関東と答えた人は，群馬県，埼玉県に故郷をもつ少数の学生であった。広い範囲にわたるアンケートをしたわけでないから，不十分であるが，おそらく徳川家康の祖先の根拠地が関東の利根川の河畔であったことを知っている人は，関東生れの人々のうちでも多くないのではないかと思う。いわんや日本国民全体として，この事実を正確に知っている人々は，いっそう少ないのではあるまいか。筆者は，このことを「日本史上の関東に関する二大問題」の一つとして，とくに指摘し，多くの人々に知っていただくよすがとしたいのである。

源頼朝は，平治の乱に悲劇的最後をとげた，清和源氏の嫡統，源義朝の子であって，多くの関東武士の後援により，平氏を亡ぼし，親のかたきをうち，鎌倉に日本史上最初の幕府を創設した人であることは，周知である。それ故指摘するにとどめる。足利尊氏についても，関東に有名な都市である足利があり，少しでも足利の歴史を知る人は，彼が日本史上第2の幕府を京都に創設した武将で，その祖先は，足利にその根拠地をもって武家として大をなした関東武士であることは，広く知られている。尊氏についても頼朝ほどでなくても，周知に近いから，指摘するにとどめる。

徳川家康については，もともと清和源氏で祖先が関東に根拠地をもっていたことについては，広くは知られていないようである。そこで，少しく書かなければならないと思う。家康は，たしかに三河の豪族松平家に生まれた。父は松平広忠，その長子として天文11年（1542年）12月26日三州岡

崎で生まれ，童名竹千代と『徳川諸家系譜』第1にある。同『系譜』によれば，竹千代は6歳のとき織田備後守信秀（信長の父）の許に人質として預けられ，天文18年2月8歳のとき岡崎城，すなわち父の許へ帰り，席あたたまる間もなく，同月今川義元の許に人質として預けられた。弘治2年正月15歳のとき，今川義元の前で元服，徳川二郎三郎元信と称することとなった。この年3月岡崎城へ帰り，弘治3年4月，16歳のとき松平蔵人元康と称した。

15歳今川義元の許で元服したとき，徳川姓を名乗ったのは，その理由については，書いてないが，氏や系図を重んじた当時，今川義元としても，家康が，男系では武家第1の名門，清和源氏の流れをくむ徳川氏から松平氏へ養子になった人の子孫であるゆえ，徳川を名乗るがよかろうという親切から出たことであろうと解釈できないでもない。また同『系譜』に，竹千代元服のとき調髪したのは，義元の妹聟関口刑部少輔親永で，このとき竹千代と親永の娘との縁談が成ったとあることからすれば，親永が娘聟になる家康に清和源氏という名門の徳川姓を名乗ることを希望し，すすめたのかも知れない。家康自身としても徳川姓を名乗ることにあこがれを感じたものと察せられる。後に徳川を表の姓，松平を裏の姓としたのも，うなずけるものがある。

では武家として第1の名門清和源氏の流れをくむ“徳川氏から松平氏への養子の子孫”とは，どういういわれがあるかを見なければならない。『徳川諸家系譜』第1には，徳川家が清和源氏であることを明記してある。すなわち，まず清和天皇の貞純親王の嫡男経基は，天徳2年（958年）始めて源氏の姓を賜わった，と記す。経基が清和源氏の祖で，その3代のちが有名な頼義で，その嫡男が，父よりも有名な義家である。義家の三男が義国で，この人が足利に来て，足利式部大輔と称した。足利氏の祖である。義国の嫡男義重は，新田大炊介と称し，上野国寺尾城主となったが，死後新田庄大田郷に葬られた。義重の四男義季は，上野国新田庄世良田郷徳川村に住し，徳川四郎と称した。義季はすなわち徳川氏の祖である。義季より7代目の政義は，新田義貞に従って戦ったが義貞戦死の後浪々の身となり，徳川村に幽居した。その孫有親は，徳川左京亮と称したが，京都から東国の制法を改め，殊に新田の末葉は草をわけ捜し求めるとの風聞があったので，息2人と共にのがれて相州藤沢の清浄光寺に赴き，剃髪して，有親は，長阿称，長男親氏は徳阿弥，二男泰親は祐阿弥と称した。永亨11年親子3人信州に赴き，翌年三州に到り，坂井の郷に居住し，徳阿弥はいくばくもなく死去した。長男親氏の徳阿弥はもと徳川次郎三郎と称したが，三州坂井郷に僧として年月を送っていたところ，松平太郎左衛門信重という庄官が親氏の人物を見込んで，娘を嫁せしめ，家督を譲りたいと申入れた。親氏はこれを諾し，松平太郎左衛門と称した。この徳川親氏改め松平太郎左衛門より9代目が家康である。その間他家からの養子はなかったから，家康は松平家に生れたが，男系では徳川氏の子孫にちがいないわけである。

以上で，日本史上の三つしかない幕府の創設者で，征夷大将軍の宣旨を朝廷より受けた人物，源頼朝，足利尊氏，徳川家康がいずれも，武家の名門中の名門である清和源氏であり，しかも関東に

縁の深い人々であったことが，わかっていただけたことと思う。このことは，日本史研究者は，ご存知の方々が多いわけであるが，私としては，一つの問題意識をもって，とくに関東の人々に広く知っていただきたいと希望して，このことを指摘したいのである。こうした問題意識をもって三源氏の幕府創設者につき書かれた日本史研究者の文章は，本篇が最初であるかも知れない。

ところで，筆者は，前に清和源氏は武家の名門中の名門と指摘だけしたが，これについては，もう少し説明が必要であろうと思う。

中世の武家の代表的なものは，源氏と平氏であるが，その2氏のうちでは源氏の日本史上の役割が平氏のそれよりはるかに重要である。ただし成立は平氏が源氏より古い。平安時代に天皇の親王の子孫の皇族の員数増加のため大きな経費を必要とし，皇室財政を困難にするにいたったため，皇族を臣籍に下して賜姓することがしばしば行われた。桓武天皇の4人の皇子の子孫は，いずれも平氏の姓を受けて臣籍に下った。桓武平氏と称されるものがこれである。平氏には，そのほか仁明平氏，文徳平氏，光孝平氏などがあるが，桓武平氏が平氏では代表的なものである。平氏では，平清盛と北条義時が権力を掌握したが，ともに征夷大将軍にはならなかった。清盛は太政大臣，義時は執権であった。したがって幕府の創設者とはいえない。征夷大将軍となり，幕府創設者となったものは，前記のように，源頼朝，足利尊氏，徳川家康の3人であり，しかもこの3人とも，武家として名門中の名門である清和源氏であった。

清和源氏が，武家として名門中の名門と見られるようになった理由は何か。その理由の1は，源氏が，前に述べたように，代表的武家である源平2氏のうち，平氏よりも日本史上より重要な役割をはたしていること。理由の2は，次の通りである。源氏にも，清和源氏のほか，多くの天皇の親王の子が源氏の姓を与えられ，臣籍に下ったのがあった。すなわち仁明源氏，文徳源氏，村上源氏，宇多源氏，陽成源氏，醍醐源氏，花山源氏，三条源氏，後三条源氏，順徳源氏，後嵯峨源氏，後深草源氏，亀山源氏，正親町源氏等が成立した。しかし，これら多くの源氏のうち，清和源氏は，圧倒的に重要な役割を果たした。それは，八幡太郎義家のような“源氏の棟梁”とか“天下第一の武士”とか称せられ，朝廷にも重用され，かつ東国武士との間に緊密な結びつきを広くつくり，東国に清和源氏の勢力を大きく扶植したすぐれた武士が清和源氏から出たことが，相当あずかっているのではないか。

ともかく，この清和源氏からのみ，日本史上重要な役割をはたした3つの幕府の創設者があらわれたことは，日本史上大きな役割をはたしたもので，特筆されなければならぬことだといわなければならない。

なお，これらの幕府創設者たちと関東との関係についても，指摘しただけであるから，やや立入って述べておきたい。最初の幕府創設者源頼朝は，前にも少しふれたように，清和源氏の嫡統で，京に生れたが，平治の乱で父が清盛との戦いにやぶれて死んだ後伊豆に流され，ここで育ち，北条

時政その他の援助を得，関東や東海，甲州等の武士たちの後援により2人の弟とともに平氏を亡ぼし，父のあだをうち，天下の覇権を握り，鎌倉に幕府を設けたのである。第2の幕府創設者足利尊氏は，関東で生れ，関東に育ったが，武将として，北条征伐，南北朝の戦いに巻きこまれ，関東武士の後援多く，戦いに次ぐ戦いの連続の中を生きぬき，ついに天下の覇権を握り，征夷大将軍の宣下をうけ，京都に幕府を開いた。第3の幕府創設者徳川家康については，先祖の徳川氏が，その故郷である上野国新田庄の徳川村を逃れ，三河の豪族松平家の養子になり，その人の9代目が家康であること，少年時2度も人質に預けられたことまでは，前に詳しく書いた。彼は長じて戦国の戦につぐ戦の渦中に巻き込まれ，主として織田信長，ついで豊臣秀吉と結び，織田と結んでは武田氏を亡ぼし，秀吉を助け，北条氏の小田城を攻め，北条氏滅亡の後，秀吉より，関東8州を与えられ，天正18年江戸城に入る。豊臣秀吉の死後，関ヶ原戦役に勝ち，ついに天下の覇権を握り，慶長8年征夷大将軍宣下，幕府を創設した。

以上によってみれば，3つの幕府の創設者は，いずれも清和源氏であること，そしていずれも関東と密接な関係あることは，明かで，特記すべきことであると思う。このことについては従来日本史の重要問題としては，強調されていないようで，この拙文が最初かも知れないが，日本史の研究者としてはこれを重要問題の一つとして見直すべきであると思う。いわんや関東人は，これを見直すのみならず，誇りをもって強調するほど，深い関心をもつべきであろうと思う。

第二節　維新を平和的市民革命とした主役，関東人・幕臣勝海舟についての新評価

——維新を平和的市民革命と規定し，その主役を勝海舟とするのは，筆者の私見かつ新見解であるゆえ，学界の批判をうける必要あること——

周知のように，明治以来大正時代頃までの維新史は，ほとんど薩長藩閥の志士たちが維新変革の推進者であるとするものであった。その一つの証拠は，維新三傑は長い間，西郷・木戸・大久保とされ，伊藤・山縣・井上・松方らは元勲とされてきたことである。大正デモクラシーの盛んになった時代以来史家の間に，そのような見解を“薩長中心史観”と見，これに批判的な見解を発表する人たちもあらわれた。その批判の要点は，薩長の志士中心に幕末・維新の転回が行われたとするのは，薩長藩閥意識から維新史における薩長の反幕運動の役割を過大評価し，科学性を欠く見方をして，真実をゆがめたものであると，いうにある。私自身も批判的な意見をもっているが，私は批判よりもむしろ私自身の積極的な見解をのべることとしたい。

維新史の解釈については，昭和8年ごろから同11年ごろにかけ，大きな論争があった。いわゆる“日本資本主義史論争”である。一方は，維新変革は，本質において封建制であるが，封建制の最後の段階である「絶対王政」を造り出したものであると主張した。それは，周知のように，コミン

テルン（当時スターリンが指導者）の「日本に対する32年テーゼ」といわれるものに書かれてある1932年の日本の政治体制は絶対王政だとする政治的な見解を直訳的に受け入れ，それに無理に資料的裏打ちをしたものであった。その見解では，明治憲法は絶対王政の憲法だということになるから，それの廃止された終戦後まで日本は絶対王政下にあったことになる。他方は，政治的な立場からでなく，純科学的・実証主義的立場から，維新をもって本質において「市民革命」であり，封建制を打倒し，近代社会を形成する出発点をなした革命であると主張した。ただし，“藩閥”その他封建遺制を相当に残存したものである，と説いたのである。

筆者は，後者の立場に立って前者の見解を批判する多くの論文，具体的にいえば，江戸時代以来の経済的発展，すなわち封建社会を下から崩壊させる資本主義的構造の萌芽の発展の評価に関する実証的諸論文を発表したのであった。

前者の説に対する支持者というよりも追随者が，その後20余年にわたり多かったが，終戦後30年代に入り，批判者が日本でも，世界的にも多くなり，維新絶対王政発端説の本家であったスターリン政権下のソ連でも，昭和30年代になるとソ連科学アカデミーの東洋学研究所の日本史研究者グループの共同研究も，基本的な点で，後者すなわち筆者たちの見解と同じ見解を発表するにいたった。そのようなわけで今では日本の学界でも，世界の学界でも，維新を「市民革命」とする見解が定説のようになった。筆者は，もちろんその後も維新変革の本質を「市民革命」とする見解を維持しているが，その後私は，市民革命史を研究するのには，その革命の本質の理解が最も重要ではあるが，そのほか，その革命の形態もしくは進行過程の特徴をも正しく理解することが必要と考えるにいたった。特徴や個性は，特例を除いて，多くの事物にある。特徴や個性を正しく認識しなければ，事物の十分の認識とはいえない。たとえば，人間の本質は，一般的なものであるが，人々によっていろいろの特徴や個性がある。人間には善人も悪人もあり，賢人も愚人もある。有能な人も無能な人もあり，積極的な人も消極的な人もある。派手な人も地味な人もあり，浪費的な人も，倹約な人もある。カッコウの好い人も悪い人もいる。彼は人間だという本質の認識だけでは，彼を真に認識したことにはならない。彼の特徴なり個性なりを正しく知らなければ，真の認識ではない。そしてよく知らなければ，彼と打ちとけて付き合いはできない。たとえば，善人と知れば信頼して付き合える。賢い人と知れば，いろいろ教えてもらうことができると思って尊敬して付き合える。これ以上の例示は無用であろう。

歴史研究においても，研究対象の本質をつかむことは重要だが，その個性や特徴をつかむこともそれについで重要である。たとえば，世界は現在不況であるが，不況にも個性や特徴がある。1920年から31年迄の昭和初年の不況と今の不況とは相違する点がいろいろある。その個性や特徴を正しく認識しえなければ，正しい対策は立てられない。革命という歴史的現象についても，同様である。本質は市民革命であるとしても，その形態における特徴なり個性なりを正しく認識し，把握し

なければ，そこから教訓を引き出すことはできない。

革命の特徴なり個性なりについても，いろいろの観点からそれを把握しうるであろう。いろいろの観点のうち暴力革命か平和革命かは，革命の形態についての最も重要な特徴であろう。たとえば，ロシア革命はその本質はプロレタリア革命であり，形態上の特徴は典型的な暴力革命であった。しかるにソ連でも終戦後に平和共存を方針とし，高度の工業国では平和革命も可能とした。またソ連革命後60年を過ぎた今，ヨーロッパ諸国の共産党はいわゆるユーロ・コムミュニズムで，平和革命を目標とするようになった。日本の共産党も平和革命を目標とするように変った。これによってプロレタリア革命にも暴力革命と平和革命とあり得ることが知られる。それと同じように，市民革命にも暴力的革命と平和的革命とがあったのではないか。それを究明することが，数年前から私の関心事となった。

そこで，私はヨーロッパの市民革命と日本の市民革命とを比較研究して，ヨーロッパの典型的市民革命であるイギリスのそれ，フランスのそれは，いずれも暴力的市民革命であり，日本の市民革命である明治維新の変革は，平和的市民革命と見てよいのではないか，と考えるにいたった。

筆者は，数年前から朝日新聞その他において，勝海舟の役割に関する新評価の諸論文のなかで，維新は平和的市民革命で，勝海舟・坂本竜馬は，幕末の動きが暴力革命に進みつつあるのを止めて，平和革命とした主役であったという新見解を発表した。私は，それらの論文に補訂を加えて，近く一書を公けにする予定である。それ故，この小文では，要点のみを述べたい。

維新の形態上の特徴と本質とを結びつけて，「平和的市民革命」とすることが正しいか否かを検討するのには，維新だけを見つめていても結論を出すのはむずかしい。世界史上市民革命の先駆をなしたヨーロッパの市民革命と比較して考察しなければならない。そこで，イギリスのピューリタン・レヴォリューションとフランスの大革命の要点を次に簡単に述べ，比較に資することとしよう。

世界史上もっとも早く行われ，もっとも典型的な「暴力的市民革命」は，周知のように，1649年のイギリスのオリバー・クロムウェルを指導者とするピューリタン・レヴォリューション（清教徒革命）である。これには長期にわたる前史があったが，議会が権利請願を通過させた1628年からイギリス王チャールズ一世（絶対王政のスチュアート王朝の王）と議会との対立が激化し，チャールズ一世は，1629年議会を解散，その後11年間議会を開かず，専制政治を行った。そして清教徒を弾圧その他暴政を行った。かくて1642年王党派の軍隊と議会派の軍隊との間に内戦が起こり，長い内戦となった。初め2年間は王の軍が優勢であったが，議会派の軍は，44年，45年と王の軍を敗り，47年には王は議会軍に渡された。その後2つの議会派の間に内部対立がおこり，相争っている間に，幽閉中の王はスコットランドの一派と軍事同盟を結び，48年王党派が反撃し，第2次内乱となった。ここにいたり，議会派の2派は和解し，議会軍は王軍とスコットランド軍の連合軍を48年撃破し，同年8月王を再び捕え，議会内に臨時高等法院を設け，王の罪を糾弾，死刑を決議し，1649年1月処

刑，同年5月イギリスが「共和国で自由国」であることを宣言した。その後については略すが，王党派と議会派との間の内戦が長期にわたり，決戦に王が敗れ，ついに王が処刑された点が特徴的である。

イギリスの清教徒革命と相並んで，市民革命の典型的なものは，1789—1799年のフランス大革命である。イギリスの市民革命の進行過程も複雑であったが，フランス大革命の経過はいっそう複雑である。フランス革命前のブルボン王朝は本質は封建制で，その最後の段階として，国民に君臨し専制政治をする絶対王政にほかならない。ブルボン王朝のルイ16世は，1774年フランス王位についたが，当時まで同国でも，封建制を下から崩壊させる資本主義的経済構造は相当に発展し，第3身分は多くは，王政に不満をいだいていた。当時の身分制度は，第一身分僧侶，第二身分貴族が特権身分。その他はみな第三身分で，そのなかに金融・商業の大資本家たちもおり，新興の商工資本家たちもいたが，資本家層も多く王の政治に不満をもった。法律家を主とする自由職業家たちのなかから王政に批判的で，革命の思想的基盤たる啓蒙思想をもつ人々が多く現われた。第三身分の下層には，小手工業者，小商人，小俸給生活者，労働者もおり，とくに多いのは農民で，農民のなかに富農層もできたが，多くは貧農で，重税や領主制の封建的諸負担に苦しみ，旧体制（アンシャン・レジーム）倒壊を求めていた。すでに旧体制の崩壊の過程は進んでいた。フランス国の財政も甚だしく困難していた。

ルイ16世は，即位後間もなく，1776年に起ったアメリカの独立革命をイギリスに対抗上援助したので，いっそう財政窮乏し，僧侶や貴族にも課税し，本来王の支持者であった層の一部を，反王政派とした。そして1789年5月3部会を招集し，革命への道を開くこととなった。この後の動きは複雑であるから一々述べず，要点のみを見れば，パリでは7月に市民が蜂起，バスティユ牢獄を破壊，8月封建的諸特権を廃止し，つづいて人権宣言を発し，人間の自由・平等，国民主権，法の前の平等，思想の自由，課税の平等，所有権の神聖など，新秩序の基本的原則を明かにした。1790年には農民暴動も各地に起り，貴族の称号の廃止が行われ，1791年国民立法議会開会，1792年パリ民衆ルイ16世を幽閉，王政廃止，共和政宣言等が行われた。そして1793年1月ルイ16世は断頭台上に処刑された。

この後も，複雑な動きがあるが，以上がフランス大革命の中核とも見られる諸事件である。

以上のように，イギリスのピューリタン・レヴォリューションでも，フランス大革命でも，大規模な内戦・内乱があり，次の社会の担い手となる新勢力が，国王を捕え，処刑したのである。それが形態上の特徴である。暴力か平和か，流血か無血かは，人間社会にとってきわめて重要なことであるから，この特徴は，重視されなければならぬものだ，と私は信ずる。そしてイギリス，フランス両国の市民革命は「暴力的市民革命」と呼んで差支えないであろうと思う。

この二つの市民革命と比較して，日本の維新変革の特徴を見れば，旧支配権者15代将軍徳川慶喜

は，慶応３年10月14日大政奉還を断行し，江戸城と江戸城下は無血で明け渡された。その結果将軍は処刑をまぬがれ，平和的に変革が行われた。この点が，維新という市民革命の形態上の最重点と見ることが正しいならば，維新を「平和的市民革命」と呼ぶことも正しいということができると思う。

このように呼ぶことには，むろん疑問を投げかける人があろう。すなわち，内乱や内戦その他流血がある程度あったのに，「平和的市民革命」と呼ぶことは，行きすぎではないか，という疑問は当然おこる。この疑問に答える前に私は，「王政復古」にいたるまでの経緯の要点を述べ，そのなかでとくに初めから平和的革命を当面の目標とし，日本が植民地化される危険があったのを阻止，日本の独立と発展を究局の目標とし，開国論を唱えて，攘夷論を批判し，挙国攘夷戦争を否定し，内戦を拡大せしめないように努力し，そのために大政奉還を門弟坂本竜馬に推進させ，最後の決戦となるべき江戸城総攻撃を西郷南洲に説いて止めさせ，無血明け渡しに成功した勝海舟についても述べたいと思う。

たしかに，維新の変革が成就するまでの間に流血はある程度あった。すなわち諸藩で保守派と革新派との間に対立・抗争が起り，ある程度血が流された。京都は文久２年ごろから尊攘運動の中心となり，元治元年７月19日の禁門の変などがおこり，この時にもある程度流血があり，その他にも京都で事件や暗殺がたびたびあった。元治元年８月，慶応２年６月に第１次，第２次の長州征伐，慶応４年１月鳥羽・伏見の戦が維新前にあり，いずれも流血はあったが，大規模な内戦にはならず，それほど大きな流血ではなかった。

倒幕・佐幕の両勢力の決戦すなわち倒幕軍の江戸城および江戸城下の総攻撃，これに対する幕軍の反撃ということになった場合には，大規模な内戦となる可能性があった。それが勝海舟と西郷南洲の努力によって回避されたが，このことは大きな意義があると見るべきであろう。ことに慶応年間になると，幕府の首脳の主戦派のなかには，フランスの援助をえて，倒幕勢力を撃破した上，幕府がイニシャティブをとって郡県制度の統一国家にしようと計画する動きがあった。陸軍奉行並，海軍奉行並にもなり，勘定奉行の要職にあった小栗上野介忠順は，仏国公使レオン・ロッシュと最も緊密に結んでいた人物で，もっとも強硬な主戦主義者であったことは，有名である。反撃を主張する人々の考えの要点は，こうである。幕府方の軍事力は薩・長に数倍するものである。とりわけ海軍力は圧倒的に強い。関東から東北にかけての地域は，幕府の地盤ゆえ，決戦ということになれば，大きな力となる。その上フランスが援助してくれる。金を貸してくれるし，銃砲，弾薬，軍艦を提供してくれるし，兵員の訓練もしてくれる。詳しく書かないが，小栗とフランスの関係は有名で，岩波書店の『日本史年表』にも，慶応年間のところに幕府とフランスの間の結びつきや借款のことを記してあるほどである。当時イギリスが，薩長側援助に傾いていたことも，周知である。

右のような情況下で，もしも小栗等の計画を阻止する力が幕府になかったならば，大きな内戦に

突き進んだであろう。大内戦は日本植民地化につながる。これを食いとめて，江戸城無血明け渡しに成功し，事態が暴力革命に向っていたのを食い止め，維新を平和革命とするのに成功したのは，勝海舟と西郷南洲であった。ただし，勝海舟がその主役である。この認識が私だけの独断でないことを知っていただくために，海舟伝のもっとも手に入りやすい，小著ながらすぐれた見方を示している，松浦玲氏著『勝海舟』（中公新書）から下に引用しよう。

「江戸城総攻撃をやっていれば，旧国家とともに徳川家そのものも完全に消滅しただろう。その代り犠牲は大きく，江戸は焼け，もしかすると諸外国の介入をまねいたかもしれない。また戦機によっては征東軍の方が敗退する可能性も皆無ではなかったろう。海舟はその戦争をほとんど独力で喰いとめた。」

上の引用に書いてあるように，「諸外国の介入をまねいた」とすれば，フランスとイギリスの介入であるが，その介入がからんで，倒幕軍に対し幕軍と佐幕諸藩の連合軍が迎え撃ったならば，その内戦は長期かつ広い地域にわたり，犠牲や流血は，非常に大きなものとなったであろう。またそのため日本は疲弊し，それに乗じ，英・仏等により植民地化されてしまう可能性も大きかったであろう。

そのような決戦・大内戦への突入を江戸城・江戸城下町々の無血明け渡しによって，食い止めた主役は，前にも指摘したように，勝海舟であった。海舟は，征東軍参謀西郷南洲との会談によって，江戸城総攻撃，江戸城下町々を兵火にかけることを止めさせるのに命がけの努力で成功した。このことは，日本の植民地化を救ったとも考えうるのであるから，日本史上の一大壮挙として，大きく評価されなければならぬことである。

この壮挙は，海舟としては，文字通り命がけで，幕府内の主戦派をも抑え，大にしては日本人間の大内戦，日本の植民地化，小にしては徳川家の滅亡を避けようという，滅私救国の至情から断行したことであった。そして重要なこととして忘れてはならないことは，この壮挙は，海舟が何年か前にすでに練り上げていた国策構想にもとづいて行ったので，行き当りばったりの行動ではなかったことである。海舟には早くから人道主義・平和主義・民主主義・合理主義・民族主義を統合した高邁な政治哲学が形成されていた。世界情勢を醒めた眼で大観し，先進国の国力・武力の強大さ，日本のそれの弱小さをもハッキリと見定め，日本の幕藩封建体制は，世界の大勢からはるかにおくれたものゆえ，速かに廃止し，統一的国民国家に再編成されるべきものと考えていた。そして速やかに開国し，列国と和親・修交の上先進諸国のあらゆる近代的文物・制度を速かに摂取・移植し，統一した日本国の力の結集により近代的統一国家を建設して，富国強兵，強兵ではまず近代的海軍の建設を速かに達成し，日本の独立と発展を図らなければならぬとの“救国・興国”の国策を立て，その国策の一環としての平和的革命構想を断行したのである。

海舟のこのような立場から見れば，当時燃えさかっていた尊攘激派の思想・行動は，感情的・観

念的・神がかり的・独善的・暴力的かつ無謀きわまる冒険主義で，とうてい“救国・興国”の思想・行動ではなく，逆に日本を“亡国”の地獄へ追いやる思想であり，行動であった。その激派の行動の頂点は，長州志士中心の尊攘激派が京都の公卿の同志たちを動かし，その公卿たちを通じ朝廷をも動かし，朝廷がついに攘夷戦断行を決定，朝廷より幕府に圧力をかけ，幕府も勅旨にしたがい，文久3年5月10日を攘夷期日とすると上奏した，その5月10日，日本として朝幕一致すなわち挙国一致攘夷戦争を開始せんとしたことである。もし断行したならば，結局敗北は必至，植民地化される可能性大と，海舟は考えたのである。

それ故に，彼は命がけの決意をもって，幕府首脳はもちろん，尊攘激派へも説きさとし，海舟の“救国・興国”の国策路線へ引き寄せようと努力して来たのである。たまたま，文久2年秋以降傑物坂本竜馬の協力を得るにいたって，海舟の，“救国・興国”の国策路線へ人々を引き寄せんとする努力は，実りはじめた。

坂本竜馬は，周知のように，勝海舟の第一の，そして最大の門弟である。そして海舟の“救国・興国”の国策路線に全く共鳴・傾倒し，海舟と同様命がけで海舟に誠心誠意をもって協力し，薩長同盟の仲介・斡旋と大政奉還まで主役として尽力・成功し，大政奉還（慶応3年10月14日慶喜大政奉還を請う）の1ヵ月後に33歳で暗殺された英傑である。その竜馬は，土佐の郷士の子で，はじめ土佐尊攘派の一人で，同派の首領武市半平太に愛されていたが，攘夷説に疑をいだきはじめ，文久2年28歳の時，脱藩，江戸へ出て，当時開国論者として高名な海舟の説を聴き，敬服して，海舟に請い門弟となった人である。その竜馬が入門の後姉へあてた手紙には，海舟を「今にては日本第一の人物勝麟太郎殿の弟子になり」と賞めて，入門を報じている。次の手紙には，「此頃は，天下無二の大軍学者勝麟太郎という大先生に門人となり，ことのほかかはいがられ候」と，“天下無二の大軍学者”の海舟にかわいがられて，喜んで働らいていることを報告している。竜馬は28歳になるまで土佐その他の藩の尊攘論者と相当多く会談している。そのなかには後に幕末・維新の英傑と見られ，維新の三傑とされている人達にも会っている。その竜馬が，入門後海舟をこのように高く評価したのは，妥当な評価であると，私は信ずる。

勝海舟は江戸で生れ，江戸で幕臣として育った人であるから，関東人でもあるが，維新後幕臣は賊徒のように考えられ，したがって東京人も，薩長藩閥の人々から，賊徒の親類くらいに考えられていた時期があった。私は幾人かの幕臣の老人の知り合いを若い時からもったが，明治の前期の間は，幕臣は賊徒と陰口を言われ，時には面と向かって賊徒といわれていたこともあると聞いた。そういう雰囲気の時代には，海舟は，竜馬が評価するように，「日本一の人物」とは一般からは評価されなかった。しかし，しだいに幕臣を賊徒とするような雰囲気は薄くなっていった。自由民権運動の盛んであった時期には反藩閥の意識は強くなった。その後も反藩閥意識はしだいに浸潤し，大正デモクラシー時代以後には，広く普及した。そして海舟に対する評価は，自由民権運動の時代に

はすでに高いものがあったが，しだいに高まった。明治以後の海舟に対する評価が，どうであったか。その資料を下にいくつか紹介しよう。

山路愛山は，幕臣出身の評論家兼歴史家で，自由民権運動に同調的な立場の人であったが，明治32年5月民友社から刊行された『勝海舟』に載録されてある「海舟先生を論ず」において，「日本の近世史を飾るべき英雄を数へば，海舟先生の如きは，其随一ならざるを得ず」と記している。坂本竜馬の幕末における海舟に対する評価とまったく同じ評価というべきである。また徳富蘇峯著『勝海舟伝』(昭和7年改造社発行)にも「幕末最後の第1人者として，覇政皇政回転の歴史に特筆大書せねばならぬ偉人」と述べている。この評価も竜馬のそれと同じというべきであろう。

以上の3つの評価よりもさらに高い評価もある。その1は，海舟の門人で嘉永3年海舟邸内に設けられた蘭学塾の塾頭であった杉亨二の自叙伝（大正6年刊）に書かれたものである。それには海舟評として「日本開闢以来の人豪也，英傑也」と記している。日本史上古今を通じての第1の英傑だとの人物評である。杉は海舟邸内の蘭学塾の塾頭にしてもらっただけでなく，海舟の推薦で老中阿部正弘の西洋事情の教師にしてもらったり，その他海舟の恩顧をこうむったことの多い人であるから，私情が少しもまつわっていないと考えるのは無理かも知れない。しかし杉は明治初年日本政府の統計作成と統計学輸入の先駆者となったほどの人物であるから，単なる私情からの評価以上のものがあろう。

その2として，これに近い評価は，岩波文庫本『海舟座談』(昭和5年初版)の末尾に収録されてある田中正造の海舟評に見られる。その要点は，「安房の知，安房の徳は，天賦にして，普通凡庸の遠く及ばざるのみか，企てて及ばざる所なり」とし，種々の品評すなわち評価あるも，「一世を以て品評すべからず，百年の後に定まる」と断じている。海舟の重要な事業は多いが，最大の偉業は，前にもふれたように，竜馬と協力して実現した大政奉還と江戸城および江戸城下の無血明渡し，したがって日本全国にわたる反幕，佐幕の両勢力の決戦としての大規模な内戦の防止，もしその時英・仏がそれぞれにバックした場合には日本が植民地化される危険をも防止，すなわち平和的市民革命と祖国の独立擁護であろうが，その時以来今年までおよそ110年余をへている。田中正造の海舟に対する評価として「品評は100年の後に定まる」と断じたのは，今日の日本国民の海舟評価の高まりや，次にのべる外国人のきわめて高い海舟評価をも予見したかのようである。田中正造は，関東人で，足尾鉱毒事件の志士・仁人である。田中が，幕末・維新の偉大な志士・仁人であった海舟を正しく評価したのは，故ありというべきであろう。

外国人のきわめて高い海舟評価とは，ユダヤ人のイザヤ・ベンダサン氏の昭和46年度ベスト・セラーとなった著書『日本人とユダヤ人』中の海舟に対する「これほどの人物は，確かに全世界を通じて1世紀に1人も出まい」という評語である。世界を通じて，1世紀に1人現われることはない，すなわち数世紀に1人出るかどうかわからない，というほどの大偉人だというのである。

以上のように，関東人・幕臣勝海舟の幕末・維新史上の役割は，ますます大きく評価されつつある。関東の人々は，海舟が関東人であることをハッキリと認識され，今や海舟が薩長藩閥の指導者西郷・木戸・大久保等の従来維新史上の主役とされた人よりも，もっとスケールの大きい真の主役であるとの評価の起りつつあることに関心をいだき，研究もされたいのである。

むすび

以上2節にわたり筆者は，「日本史上の関東に関する2大問題」につき論述した。この拙文は，“論述”であって，一人の歴史研究者として，新しく発掘した史料にもとづき考証し，まとめた“叙述”ではない。何故このような“論述”をこころみたかといえば，次のような理由による。

関東は，主として利根川水系，その他水系によって造られた日本一の大平原である。単なる都と諸県の行政的組み合せではない。自然的，地形的形成にかかる一つの広域である。東京という首都にしても，関東大平原と東京湾があったからこそ成立したものである。

そこで私は，単に東京都人，埼玉県人等々を越えた関東人というカテゴリーの考え方を前々からもってきた。私は東京市に生れたが，以上のような考慮から，私の故郷は関東だと考えてきた。かくて関東に少年時代から関心をもちはじめ，関心はますます深まった。そして日本史研究者として関東の歴史にも深い関心をもってきた。本紀要に寄稿を求められたについて，かねてからいだいていた関東史の二大問題を，2節にわたって一つの問題意識をもってまとめてみたわけである。

2節にわけて“論述”した内容は，個々的にはすでに知られたものが少くないが，そうした個々の歴史的事象につき，私独特の問題意識をもってまとめたために，新見解といってよいものを述べることとなったが，新見解，私見であるから，学界からのご批判を期待するわけである。

そこで筆者は，この“むすび”において，第2節の問題点から，第1節のそれへと，簡単に述べて，読者とくに関東人の読者に対する呼びかけと希望を書きたいと思う。

第2節において，筆者は，勝海舟（坂本竜馬の協力をも含めて）の幕末・維新の役割を高く評価し，維新革命が「暴力革命」に進行しつつあったのを食い止め，「平和的市民革命」に変ずるのに主役を果たした功績は，薩長藩閥の志士たちのそれにまさるものがあると述べた。維新を「平和的市民革命」と規定するのも，海舟の役割をその主役とするのも新説であるから批判をまたなければならない。筆者は批判を切望する。筆者は批判があっても，基本的な点で，私の新見解を誤まりだとする人はおそらくあるまいと考えている。

それはともかく，上に述べたところによって，維新変革の主要推進者は，維新後薩長藩閥政府の指導者となった，かつての志士たちであるとの見方が，再検討されなければならぬこと，また関東人，幕臣勝海舟の幕末・維新の指導的役割の大きいことについて大いに見直さなければならぬこと

は，読者に知っていただけたと思う。

ことに関東人として関東に郷土愛をもつ人々は，幕末・維新期の勝海舟という大指導者，大英雄と明治・大正の興隆期の実業界における渋沢栄一という大指導者が，いずれも関東人であったことに，誇りをもたれることを希望し関東郷土史の研究にいっそうの情熱をもって努められんことをも期待したいのである。

さらに，関東の人々が，筆者が第1節に述べた中世以来近世まで日本史上に成立した3つの幕府の創立者たちがいずれも関東に故郷をもつ人か，そうであった人の子孫か，関東に縁故深く，関東武士の援助によって，天下の覇権をにぎり，征夷大将軍となった人であることにも関心をもたれ，関東郷土史の中世・近世期いいかえれば武家時代にもいっそう深い関心をいだき，さらに大きい郷土愛と誇りをもって，研究に努められんことを切望するのである。